

教師の在り方が、生徒の基準に

2026・9・16 重枝 一郎

教師は、生徒のために何かをしなければならないと感じるものである。何かを教え、先回りし、後れを取らないように常に気を配っている。教科の成績、部活動の結果、他者との比較、そのどれもが頭から離れない。その結果、生徒と話す時の多くが、評価と心配で埋め尽くされる。

生徒の1日をデザインする時、早めに始める、量を増やす、難しいことも与える、このような前提が頭に浮かぶ。もし、少しでも空白があると教師は不安になることもある。

私たち教師は、学校で多くの生徒たちと接している。私は、生徒に教えれば教えるほど、生徒の中で大事なものが削られていく感覚になることがある。教師が良かれと思って加えたことが、生徒の世界を貧しくしている感覚である。教師が「してやっている」と感じていることほど、生徒の自然な成長を妨げているのではないだろうかと思うことがある。なぜなら、生徒の心は教師の意図をとて感じ取るからである。実は、生徒は、ほめ言葉より先に、期待と焦りの感度を上げてしまっている。

生徒は、外から教え込まれるときではなく、よく意味も分からないまま何かをじっと見つめている時が一番豊かな時間になっていると聞いたことがある。教師が絶えず口を挟むと、その時間は細かく切れてしまう。そして生徒の心は、自分の興味ではなく、教師の表情の変化に慣らされていく。

よく「教師はただ座っているだけでいい」という話を聞く。これは放置するということではなく、余計な意図を差し込まず、静かに同じ場所にいるということである。何かを教え込むということではなく、教師自身の心を整え、平静にしておくためにそこに座るということである。教師が平静な心で、ただ共にいる時、生徒は安心して目の前のことに集中する。

「教師の在り方が生徒の基準になる」というのは、生徒は教師の言葉より先に、教師の在り方そのものを基準にして受け取っている。生徒は何が普通かを、説明ではなく、教師の雰囲気から決めている。この教師の在り方とは、立派な振る舞いをしろと言っているのではない。心の向きの話である。自分の心がどの向きを向いているかのことである。自分の都合ばかりに向いていれば、生徒はそれが当たり前だと思うようになる。目の前のものごとに素直に敬意を向けていれば、それが当たり前というようになる。

私は数学の先生だが、数学を教える時、教える側の在り方は生徒の基準になると思っている。正解を出すことだけを重んじる教師のもとでは、生徒は結果だけを気にするようになる。解くプロセスを大事にする教師のもとでは、生徒も途中の考え方を気にするようになる。

結局生徒は、評価より先に、「目の前の教師は、何を大事にしている大人なのか」を感じ取っている。

私たち教師も人間である。いつも落ち着いた振る舞いをしろと言われても無理な話である。腹を立てることもあるし、弱っている日もある。大事なのは、その時の自分の心が乱れていると認め、乱れたままを正しい基準として見せないことだと思う。

こんな話がある。例えば、子どもがコップの水をこぼしたとする。親がその瞬間、顔をしかめて大きな声を出せば、「失敗＝怒りを呼ぶもの」という基準が刻まれる。逆に一呼吸おいて、淡々と片付けながら、どうすれば次はやりやすいかを一緒に考えれば、「失敗＝工夫のきっかけ」という基準が刻まれる。

同じ出来事でも、教師の在り方が、生徒の世界の意味を変える。

今回の話を、「教師→親」「生徒→子ども」に置きかえて、Sence of Mission に掲載する。